

接尾語カヌの下接語の時代的变化

——助動詞ツとの関係の衰退——

要旨

不可能・困難の意味を表すと言われる接尾語カヌを下接語によつて次の三種類に分け、下接語の変化の過程と原因を考察する。

a 類……カヌ+完了の助動詞ツ

b 類……カヌ+接続助詞テ・ツツ、及び連用中止カネ

c 類……その他

b 類はその用法上ツを伴わないのが自然で a 類とは相補的關係にあるので、これを除外して a 類と c 類の勢力の張り合いを考えると、上代から十世紀までは a 類が圧倒的優勢で c 類はわずかであり、本来カヌとツは不可分だったものと思われる。

紀元千年頃から c 類が増加しはじめ、十一・十二世紀には a 類と c 類のいずれかが著しく優勢ということはなく、両者が共存する。b 類の存在がこの変化を助長したと考えられる。

十三世紀以後は c 類が大幅に優勢を占め、a 類は極度に衰退するに至っている。この変化の原因としては、本来カヌとツにあった不可能の意味が、カヌ自体にあると見なされるに至った結果、カヌの意味が意志的・作爲的でなくなり、ツを下接するにふさわしくなくなつたこと、カヌとツのテンス・アスペクトの意味が狭くなったこと等が考えられる。

近藤 明

一、はじめに

動詞・補助動詞・動詞的接尾語等動詞的な性格を有する語の中には、特定の下接語と極めて密接な関係を持つものがあり、またその関係に著しい時代的变化の見られる場合がある。それをしとげようとしても不可能・困難の意（岩波古語辞典）を表すと言われる接尾語カヌは、下接語がツ助動詞に偏る傾向が著しいが、このカヌとツとの関係は時代とともに衰退して、むしろカヌにツが下接する方が例外的となるまでに至る。本稿ではこのカヌの下接語の時代的变化の過程を明らかにするとともに、そのような変化が生じた原因、同様の变化をした他の語との共通点を探っていく。なお、問題をツとの関係の変化に置くので、調査の対象は上代から中世の文語的資料までとし、中世後期の口語的資料や近世以後は対象としない。

二、上代のカヌ

1、下接語によるカヌの分類

まず本稿における下接語によるカヌの分類法を示し、それに基づいて上代のカヌの下接語の偏りの状況を把握しておく。表1にも示

すように、本稿ではカヌを下接語によって以下の三類に分けることにする。

a類……カヌ十ツ

b類……カヌ十接続助詞テ・ツツ、及び連用中止カネ

c類……その他

敬讓の補助動詞及び助動詞ル・ラル・サスを伴うものは、それらを介して下接する語によって分類する。従つてカネタマヒツはa類、カネタマヒテはb類のカヌ十テ、カネタマヒケリはc類になる。またc類のカヌ十ゆは終止形や係り結びで文末終止するもの、連体法・準体法のものである。

上代においては、次の佐伯梅友氏の指摘のようにa類の比重が極めて大きい。

集(引用者注、万葉集)中の例は未然形と連用形とだけで、「カヌル」カモ」の如き連体形や、「カヌラク」といふ言い方などは例がない。またその未然形も「カネメヤ」だけ、連用形も続く言葉はいわゆる完了の助動詞「つ」及びその活用か、それから出た助詞「て」に限られてゐることは注意しなければならぬ。^{注4}
表1に各類の用例数を示したが、上代の和歌・歌謡に現れる仮名書のカヌ五十五例中a類は三十八例と七十パーセント近くを占めてゐる。

①世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ち可_レ津鳥にしあらねば
(万葉集 八九三)

②飯はめどうまくもあらず行き行けど安くもあらずあかねさす君が心し忘れ可_レ津毛
(同 三八五七)

③……たわやめと 言はくも著く 手童の ねのみ泣きつつ た

もとほり 君が使を 待ちや兼手六 (同 六一九)

④帰りにし人を思ふとぬば玉のその夜は我も宿寝金手寸 (同 三二六九)

これらのうち、①②のように他にテンス・アスペクトに関わる語が下接しないものは、いずれも現在の不可能状態を表していると思われる。^{注4} 未来や過去の不可能状態を表す時は、③④のように他の助動詞が更に下接しているのである。

b類は、承接関係等の点でa類と相補的關係にあつて、ツを下接しないのがむしろ当然と思われるものである。b類に分類したカヌ十テ(⑤⑥)、カヌ十ツツ(上代には例が見られないが十世紀以後使われた)、連用中止カネ(⑦)はいずれも、カヌを含む文節が中止・並列の關係で後の文節に続く形である。一方、ツはテ・ツツ・ナガラを下接することがなく、連用中止法を持たない。^{注4} 即ち、ツを含んだ文節は中止・並列の關係で後に続くことがないのである。ツがカヌに下接した場合もこの点に変わりはないとすれば、カヌ十ツを含んだ文節が中止・並列の關係で続いていくカネテテとかカネテツツという形は存在し難い筈であり、事実そのような用例はない。とすると、カヌとツの關係が非常に密接であつても、カヌを含む文節が中止・並列の關係で次に続いていく場合に限つてツを伴わないb類のような形になるのは、当然である。従つてa類の勢力の強弱を論じる際には、b類は除外して、専らc類との關係を問題にしなければならぬ。このようにb類を別扱いすると、上代におけるa類の比率は表1に示すように四十例中三十八例で九十五パーセントとなる。先にb類を含めて単純に計算した七十パーセント近くという数字から考えられる以上に、カヌとツの關係は密接であることが

知れる。従来はb類、ことに連用中止カネの位置づけが不十分だったために、カヌとツの關係の密接さが過少に評価された嫌いがある。

⑤ 恋繁み慰め可^レ祢^レ弓^レひぐらしの鳴く鳥影に庵するかも

(万葉集 三六二〇)

⑥ うつせみの八十言の葉は繁くとも争ひ可^レ祢^レ我を言なすな

(同 三四五六)

⑦ 行く船を振りとどみ可^レ祢^レいかばかり恋しくありけむ松浦佐用姫

(同 八七五)

カヌ+テと連用中止カネは、和歌・歌謡では音数律に合せて使い分けられているようだが、それ以外に両者の間に意味・用法の差は見出し難い。この点は中古以後も同様である。ツ+テの語源的なつながりからは、カヌ+テの方がカヌ+ツに近いことになりそうだが、資料で知り得る範囲内でそのような差は見出せない。

この他に、実際にそのような用例はないが、カヌが接続助詞ナガラや否定辞を伴うことがあれば、やはりツを介さないのが自然と思われる。前者は他のb類と同様の理由により、後者はツが否定辞を下に伴うことが極めて稀なことによる。従って、カヌ+ナガラやカヌ+否定辞が存在すればそれはb類として扱うべきである。
c類は上代ではムの下接した次の二例がこれに該当する。

⑧ 世の中の女にしあれば吾が渡る足痛の河を渡り金目八

(万葉集 六四三)

⑨ 白髪し子らも生ひなばかくの如若けむ子らに罵らえ金目八

(同 三七九三)

ムはテ・ツツ等と異なり、ツを介しても下接し得る語だが、ツを介してムを下接する③と、ツを介さずにムが下接する⑧⑨を比べる

と、いずれも疑問推量の形を取っているが、前者は「待ちかね」ることを肯定的に推量しているのに対して、後者は「渡りかね」ると、「罵らえかね」ることを否定的に推量する反語表現である。このような否定的疑問推量・否定的反語表現は、否定判断を表すものである点においてズ・ジ等の否定辞による否定表現と共通している。そのためカヌ+ツが否定辞を伴い難いであろうように否定的疑問推量・否定的反語表現を伴った「罵らえカネテメヤ」という形も存在し難かつたものと見れば、同じくムが下接していても③はツを介し⑧⑨はツを介さないことの説明がつく。そうであれば⑧⑨は実際にはb類に近いことになる。

b類・c類について以上のように考えると、上代のカヌは承接関係等の点で困難な場合以外は全てツを下接することになり、上代においてカヌとツは殆ど不可分に近いものとして捉え得る。

なお上代の散文資料にはカヌの例が見出せないが、散文資料そのものが少ない時代でもあり、必ずしもカヌが和歌・歌謡専用語だったためと考える必要はない。

また次の例は問題が多く、分類の対象外とした。

⑩ 夕月夜晩闇の朝影に我が身はなりぬ汝を思金丹

(万葉集 二六六四)

「丹」を衍字とする説(略解所引官長説)や「手」の誤字とする説(古義があるが、現存する伝本の本文は全て「丹」である点を重視して本文は「金丹」であると見たい。しかし「丹」を本文として認める立場でもその意味・品詞に関しては説が別れており、にわかには決断し難い。なお中古以後もカネニの形は見られるが、上代に準じて扱いを保留しておく。但し中古以後のカネニは必ずしも

表1 カヌの下接語の変化

散 文					和 歌 ・ 歌 謡					上 代		
14・5世紀	13世紀	12世紀	11世紀	10世紀	14世紀	13世紀	12世紀	11世紀	9・10世紀			
1			1	1	3	10	18	14	28	38	ツ	a類
46	47	8	12	2	8	46	33	14	8	11	テ	b類
	1		4	1	7	17	4	1	2		ツツ	
9	4		5		5	43	53	6	8	4	連用中止	c類
		1			14	9	9	1			ヌ	
25	12		13		3	12	4	1	1		リ・タリ	
2	6		2		4	4	4	2	1		キ・ケリ	
					1	1				2	ム	
2	1		1		5	4	9	3	1		ラム・ケム・メリ・ベシ・マシ	
5	3	1	8		8	20	14	3	1		ヅ	類
34	22	2	24		35	50	40	10	4	2	計	
$\frac{1}{35}$	$\frac{0}{22}$	$\frac{0}{2}$	$\frac{1}{25}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{38}$	$\frac{10}{60}$	$\frac{18}{58}$	$\frac{14}{24}$	$\frac{28}{32}$	$\frac{38}{40}$	a類の比率	$\left[\frac{a類}{a類+c類} \right]$
					7.9	16.7	31.0	58.3	87.5	95.0	%	

○散文のa類は数が少ないため、a類の比率をパーセンテージに直して比較しても意味が少ないので省略した。表2も同様。

上代のものと等質とは限らない。

また「待兼山」「待兼の里」等地名と掛詞になっているものが中古以後に見られるが、これも分類の対象外とする。

2 カヌとツの不可分性

a類のカヌとツのツが、不可能の意味のカヌに完了・過去の意味や確述の意味を添えるだけのものならば、承接関係等の点で困難な場合以外は全てのカヌにツが下接するような事態は生じ難いだろう。ではこのツとカヌと一体となって不可能の意味を表すものと見てはどうであろうか。即ち、カヌとツが不可能表現としての本来の形で、今日カヌの意味と考えられているものは、実はカヌとツの意味ではないかと考えるのである。そうすると上代における両者の結びつきの強さも、上代のカヌとツが単独では現在の不可能状態を表すことも説明が可能で、今まで述べてきたカヌの用法に合致する。ではいかにしてカヌとツが不可能の意味を表すようになったのだろうか。次に一案を示しておく。

カヌは「予想する・予定する」意味の動詞兼ヌから派生したもので、副詞のカネテ、或いは后ガネ・カネゴト等の語とも関連があると考えられる。^{注9}このカヌが動詞に下接すれば「動作の実現を予想する・目指す」という意味となろう。更にそれに

ツが下接して「(実現不可能と判断して)動作の実現を目指すことを止める・放棄する」或いは「動作の実現が予想にとどまった」の意となり、更に「実現しようとしてそれが不可能である」の意に転じた。なお同じ完了の助動詞でもヌが下接しないのは、カヌが前述のような意志的・作爲的な意味を持っていたので、無意志的・自然推移的な意味の動詞に下接するヌとは相性が悪い^{往例}ため、リ・タリが下接しないのは、リ・タリはツ・ヌと異なつて存在・継続が本来の意味で、カヌに下接して不可能の意味に転じ得ないためとすれば説明がつく。

しかしこの説明には、以下に示すカヌ+ツの人称の偏りが生じる理由を充分説明できない等未だ不完全な点もあり、更に考察を要する。

3、a類の人称の偏り

上代においても中古以後においても、和歌・歌謡のカヌと散文のカヌとの間には、用例数やa類とc類の比率の上で、大きな差が認められ、両者を統一的に把握することは不可能のように見える。しかしこの一見文体差と思われるものは、a類の人称の偏りによるところが大きいと思われる。その点を差し引いて考察すると、和歌・歌謡のカヌと散文のカヌはほぼ時期を同じくして同傾向の変化を遂げたものとして把握できる。

上代のa類の人称の偏りについては「かねつ」の歌はすべて一人称である」という吉田金彦氏の指摘があるが、この指摘の通り、①④の例をはじめとして上代のa類は全て一人称である。しかもこの傾向は上代のみならず中古以後も根強く続いている。表2に示す

表2 カヌの1人称への偏り

散 文					和 歌 ・ 歌 謡					上 代	a 類
14・15世紀	13世紀	12世紀	11世紀	10世紀	14世紀	13世紀	12世紀	11世紀	9・10世紀		
1/1	/	/	1/1	1/1	3/3	10/10	18/18	13/14	28/28	38/38	
3/55	11/52	3/8	6/21	1/3	17/20	82/106	77/90	19/21	10/18	8/15	b 類
/	/	0/1	/	/	14/14	9/9	9/9	0/1	/	/	カヌ+ヌ
5/34	5/22	0/1	1/24	/	11/21	32/41	22/31	4/9	2/4	1/2	他
6/35	5/22	0/2	2/25	1/1	28/73.7	51/85.0	49/84.5	17/70.8	30/93.8	39/97.5	a 類・c 類合計 %

○分母は各項目に該当する用例の総数を、分子は1人称の用例の内訳を示す。

ように、十五世紀まで歌・散文を問わずa類は殆ど全てが一人称で、例外は三人称に用いられた次の一例のみである。

⑩時雨の雨染めかねてけり山城のときは森の真木の下葉は

(能因集 一七三)

ツそのものにも一人称が多い傾向があることを吉田氏は指摘されているが、a類の人称の偏りはツ一般のそれと比べても極端である。

一方、b類・c類には上代にも中古以後にも著しい人称の偏りは認められない。⑤⑧は一人称、⑥⑨は二人称、⑦は三人称である。

a類にのみ人称の偏りが存在する理由は現在のところ明らかにならないが、このような偏りが存在する以上、一人称の叙述の多い文章ではa類の使用される機会が多く、一人称の叙述の比較的少ない文章ではその機会も少ない筈である。詠み手自身の感情の表出を中心とする和歌・歌謡は概ね前者に該当し、散文は比較の後者に近いだろう。先に述べた数字の差はこの点によるところが大きいと思われる。更に散文の中でも物語の類の他の部分では、場面・人物を三人称的に描写することが多く、一人称の叙述は極めて少ないものと思像できる。一方日記・随筆等や会話・心内詞等では筆者・登場人物の自己表出が行われやすいため一人称の叙述が多いと考えられ、実際散文におけるa類の多くはこの様な部分で用いられている。またb類・c類の一人称のものも同様の現れ方をする。

三、中古以後の下接語の変化

1、a類優勢の段階——十世紀まで

中古に入っても、十世紀までは表1に見られるようにa類がc類に対して依然著しく優勢を占めている。

⑫我が心慰めかねつ更級やをば捨て山に照る月を見て

(古今集 八七八)

⑬「多くの御財は尽すとも、得かねてんやは」

(宇津保物語 藤原の君 会話)

⑭はカナツが否定的反語表現を伴うもので、上代にはなかった例である。

c類は和歌に四例見られるのみで、a類に対しての数の少なさは上代と大差ないが、四例とも上代と違つて否定的疑問推量・否定的反語表現ではなく、この点や用法が広くなっている。

⑮夜半に出でて渡りぞかぬる涙川淵となかれて深く見ゆれば

(平中物語 二六段 歌 「カナ+ゆ」)

⑯さ夜更けて岩ほに結ぶ水の音を忍びかねたる虫の声かな

(貞元二年類忠前裁歌合 八六 「カナ+タリ」)

散文では歌と比べて全般にカナが少ないが、前節で指摘した人称の問題に加えて、この時期には訓点資料以外の散文資料が少なく、しかもカナは非漢文訓読語と考えられるから、^{はは}散文中の用例が少ないのは当然である。

2、a類・c類共存の段階——十一・十二世紀

和歌・歌謡と散文を通じて紀元千年頃がカナの下接語の大きな転換期と思われる、この頃からc類が目立つて増加し、以後a類・c類のいづれかが著しく優勢ということがなく両者が共存する段階が、^{はは}ほぼ十二世紀まで続く。

⑰「さまざまに人知れず思ひ定めかねはべる」

(源氏物語 胡蝶 会話 「カナ+ゆ」)

⑬ 雪の上も暮しかねける春の日を所がらともながめつるかな

(枕草子「三月ばかり物思しにとて」段歌 「カヌ+ケリ」)

⑭ 清少納言の歌は中宮定子から「かねける」いとにくし」と非難されておりその理由に諸説があるが、カヌの下接語の問題と見れば、当時まだ耳新しかったc類のカヌ+ケリが定子の規範意識に抵触したものと説明できる。^{注14}

十一・十二世紀の散文においてa類は次の一例だけで、心内詞におけるものである。その比率は同時期の和歌・歌謡のa類と比べて著しく少ないがこれは前節で挙げた人称の偏りに基づくものである。

⑮ 「この世にては慰めかねつべきわざなめり」

(源氏物語 宿木 心内詞)

この時期におけるカヌとツの関係の稀薄化の一因として、b類の存在が考えられる。b類は前述のようにa類とは相補的關係にあって、カヌとツの結びつきがいかに密接でも、ツを下接しないのがむしろ当然なものである。そのような事情があるにせよ、b類はツを下接せずにa類と同様の意味で用いられたわけで、これによってカヌとツは必ずしも不可分のものではないという意識が形成・助長され、c類が出現し増加することが可能な背景が形成されたものと考ええることができる。

特定の用法の存在が、下接語との密接な関係の稀薄化の原因となることはカヌとツの場合に限らない。例えばやはり不可能の意味を表すと言われる接尾語カツ(ガツ)は、上代には否定辞を下接してはじめて不可能の意味を表し得たが、後には単独で不可能の意味を持つものとして意識されるようになり、ガテノ・ガテヲ等の形も現れた。

これは、本来「ガツ+否定の助動詞ズの連体形ニ」であったがガテニがいわゆる形容動詞の連用形として受け取られるようになり、ガツと否定辞は不可分ではないと意識されるようになったことが一因と言われている。^{注15} カツの場合ガテニの存在が否定辞との関係を稀薄化したわけだが、カヌの場合はb類の存在がツとの関係を稀薄化したことになる。

3、c類優勢の段階——十三世紀以後

十三世紀に至るとc類が圧倒的に優勢となつてa類は著しく衰退しており、殊に散文では十三世紀以後次の一例以外にa類の例は見られない。

⑯ 「前二ハ京中ヲ経テ遙々ト東寺マデ寄レバコソ、小路ギリニ前後左右ノ敵ヲ防カネテ其困ヲバ救カネツレ」

(太平記 卷一七 会話)

和歌ではある程度の数のa類が用いられているが、それでも比較的a類が多用されるのは、古い歌からの本歌取による歌を除けば、実朝・明恵・顕昭ら古語の知識が豊富か古語への志向が強いと思われる特定の歌人の歌に限られる。^{注16} a類は和歌においても、数字から伺える以上に衰退しているわけである。なお千五百番歌合九一五左の顕昭の歌

⑰ 武蔵野や草のゆかりも問ひかねつづきの原の雪の夕暮

には「かねつといふつもじぞ如何侍べき」とか「つ文字ぞ心えかねぬれども」という判詞があり、a類使用に対する違和感の表明と取れる。

これに対してc類は圧倒的に優勢を占めるようになるが、c類には著しい人称の偏りがなく、従つて和歌・歌謡と散文とで用例数が

極端に異なることもない。但し、②のようなカヌ+ツのみは、理由は分らないが十三世紀以後は全てが一人称で、用例が和歌に偏るのはそのためだろう。

②いかにせむながめかねぬるなごりかなさらぬだにこそ雪の夕暮
(建礼門院右京大夫集 二六三 「カヌ+ヌ」)

②②宿借りかねたりつれどさすがに人のなき宿もありけり

(十六夜日記 地 「カヌ+タリ」)

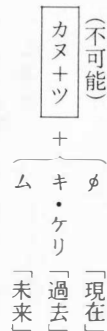
②③このこと見聞くに、そぞろに涙もれ出で、たもとをしほりかね
き
(撰集抄 巻七 地 「カヌ+キ」)

②④さまざま興ありし事ども、思ひいで語りつづけて、永日を暮し
かね給ふぞ哀れる
(平家物語 巻九 地 「カヌ+ゆ」)

単にカヌとツを不可分とする意識が稀薄化しただけならば、a類とc類が共存する十二世紀までの段階にとどまる筈で、これ程a類が衰退するとは思えない。何らかの事情でa類が使われ難くなったものと考えざるを得ない。その一つとしてまずカヌ単独の意味に変化が生じたためにツが下接語としてなじまなくなったことが考えられる。

前述のように古くはカヌ単独の意味は「動作の実現を予想する・目指す」というものだったとすると、意志的・作爲的な意味の動詞に下接すると言われるツが下接するにふさわしい。しかしカヌとツが不可分であるという意識が薄れて、本来カヌ+ツの有していた不可能の意味がカヌ自体に存在するものと意識されるようになる。ツは以前程カヌの下接語として適当ではなくなるであろう。即ち、カヌ+ツの意味上の異分析に基づくカヌの意味変化により、ツが下接し難くなったわけである。

第二にカヌ+ツのテンス・アスペクトの意味の変化によってa類の使用可能な範囲が狭まったことが考えられる。前述のように上代のカヌ+ツは基本的に現在の不可能状態を表し、他の語が下接することによって過去・未来のことも表せる。これを図示すると次のようになる。



一方①の「破カネツレ」は一敵の囲みを破ることが不可能な状態だった」という意味で、テンス的には過去のことであり、この点上代とは違いが見られる。また②の例ではカヌ+ツは上代以来の用法通り現在の不可能状態を表しているが、カヌ+ツの意味を「とひかね」る動作が完了した^{注17}と取るのが千五百番歌合当時の一般の言語意識だったとすれば、判者が「かねつといふつもじぞ如何侍べき」と評した理由が納得できる。このように、十三世紀以後にはカヌ+ツのテンス・アスペクトの意味が、上代をはじめとする古い時代のそれとは異なっていたと思われる場合があるのだが、これはカヌ+ツの意味関係の変化に基づくものと考えられる。カヌとツが必ずしも不可分でなくなると、次の図のように不可能の意味に関わるのはカヌだけで、ツはそれにテンス・アスペクトの意味を添えるものと意識されることになる。



即ちカヌ+ツの意味上の異分析の結果、カヌ+ツのテンス・アス

ペクトの意味が狭くなって現在や未来の不可能状態は表し難くなったというわけで、これに伴ってa類の使用される機会は減少することになる筈である。

以上の二つはいずれも、本来はカヌ+ツの有していた不可能の意味がカヌ自体にあると考えられるに至ったことに起因するものであるが、この点やはりカツの下接語の変化の場合と類似する。カツは本来は否定辞を下接してはじめて不可能の意味を表したが、カツ(ガツ)単独で不可能の意味を有すると意識されるに至って否定辞を下接しなくなった。カツの場合もカヌの場合も、意味上の異分析の結果、かつて緊密な関係にあった下接語がむしろ排斥されるに至ったことになる。

四、おわりに

以上、ツとの関係の稀薄化を中心にカヌの下接語の変化の過程を明らかにするとともに、その原因を考察してカツの場合との共通性を指摘した。

今後は、まずカヌとツの意味上の関係をより明らかにすること、a類にのみ人称の偏りが存在する理由の解明が必要である。更に、今回論じたカヌに対するツやカツに対する否定辞のように、ある語に対して極めて密接な関係にあった下接語が逆に殆ど下接しないようになるという変化として他にどのようなものがあるのか、その変化の過程・原因はカヌやカツの場合とどの程度類似性を有するのかを明らかにしたい。

またカヌの下接語と人称の関連について考えると、人称に偏りのないc類が増加したことによって、カヌの人称は全体に多様化している。即ち上代から十世紀までの和歌・歌謡においてはb類以外の

カヌの内一人称のものが九十パーセント以上だが、十一世紀には七十パーセント程度に減っており(表2)、その分カヌの用法は人称の面で拡大したわけである。散文でのカヌの用例が十一世紀には大幅に増加しているのも、これに伴うものと考えられる。このようなカヌの用法の拡大に伴い、カツ、アフ(下二段)、ガタシなどの他の不可能表現の消長との関連が問題になることも予想され、併せて今後の課題としたい。

(資料一覽)

括弧内に注記のないものは日本古典文学大系によった。引用の際、多少表記を改めたところがある。

(上代) 記紀歌謡(古代歌謡全注釈古事記編・日本書紀編) 風土記

歌謡 万葉集 (九世紀・十世紀) 小町集・友則集(私家集)

小町業平(通昭総索引) 貫之集(紀貫之全歌集総索引) 躬恒集(校本)

友則能因(通昭総索引) 馬内侍集(校本馬内侍集と総索引)

凡河内躬恒全歌集と総索引) 古今集 後撰集(後撰和歌集総索引) 伊勢物語(伊勢物語に就きて

の研究校本篇) 平中物語(平中物語本文と索引) 蜻蛉日記(かげ

ろふ日記総索引) 宇津保物語(宇津保物語本文と索引本文編)

(十一世紀) 能因集(小町集と同じ) 拾遺集(拾遺和歌集の研究校本

本篇) 後拾遺集(後拾遺和歌集総索引) 枕草子(枕草子総索引)

源氏物語(源氏物語大成校異篇) 和泉式部日記(和泉式部日記総索

引) 更級日記(更級日記総索引) 栄花物語(栄花物語本文と索引

本文篇) 夜の寝覚 狭衣物語 (十二世紀) 山家集・聞書集(西行

法師全歌集総索引) 金葉集(金葉和歌集総索引) 詞花集(詞花集

総索引) 千載集(笠間書院 千載和歌集) 六百番歌合(新校六百

番歌合) 讀岐典侍日記(校本讀岐典侍日記) 今鏡(今鏡本文及び

総索引) 今昔物語 古本説話集(古本説話集総索引) 唐物語(唐

物語校本及び総索引) (十三世紀) 鎌倉右大臣家集(鎌倉右大臣

家集総索引) 建礼門院右京大夫集(建礼門院右京大夫集校本及び総索引) 明恵上人歌集(極楽願住生歌・明恵上人歌集本文と索引)

新古今集 新勅撰集(新勅撰集総索引) 続後撰集(続後撰集総索引) 続古今集(続古今集総索引) 続拾遺集(続拾遺集総索引) 千

五百番歌合(古典文庫) 源家長日記(源家長日記校本・研究・総索引) 弁内侍日記(弁内侍日記新注) 中務内侍日記(中務内侍日記

新注) 都の別れ(飛鳥井雅有日記全集) 十六夜日記(十六夜日記校本及び総索引) 無名草子(新潮古典集成)

海道日記(海道日記の研究本文篇研究篇) 宇治拾遺物語 閑居友(閑居友本文及び総索引) 今物語(中世の文学) 撰集抄(撰集抄校本篇) 発心集(新潮古典

集成) 十訓抄(古典文庫) 古今著聞集 沙石集(慶長十年古活字本沙石集総索引本文篇) 保元物語 平治物語 平家物語(十四・十五

世紀) 兼好集(兼好法師全歌集総索引) 玉葉集(新編国歌大観風雅集(中世の文学) とはずがたり(新潮古典集成) 増鏡 梅松

論(新撰日本古典文庫) 曾我物語 義経記 三国伝記(中世の文学)

他に新編国歌大観私家集編所収の私家集と、平安朝歌合大成所収の歌合中伝本の存するもの。複数の資料に重出する歌は最も古い資料のもののみを取り、歌集に収められた歌で編纂年代よりも著しく成立の古い歌は除く。

注1 「難」「不勝」「不得」の訓について(『万葉語研究』昭13・4 文学社 所収 同書一二二頁)。

注2 資料一覧に示す上代資料の用例数の総計。中古以後は世紀毎に各資料の用例数の総計を表に示す。より正確を期するならば、資料別の用例数を示すべきだろうが、紙幅の問題もあり、また本稿の中心課題であるa類とc類の勢力関係の変化を把握するには大きな支障

はないものと判断して(無論常に各資料の性質の差に留意することが必要だが)、和歌・歌謡と散文とに大別することとめた。注3 次の万葉集四二二四の「不得留」は一般にトドミカネツと訓まれているが、「止められなかった」と過去の意味に解せる。……玉ほこの 道来る人の 伝言に 我に語らく たらちねの 御母の命……玉藻なす 靡き臥し伏し 行く水の 不得留と……従ってこの例のみ例外である可能性があるが、表記上他の訓み方の可能性を排除できず、確例とは言えない。注4 この点は既に助詞・助動詞の相互承接を論じた先行文献において言及されており、拙稿「助動詞「つ」「ぬ」の否定法・接続法・中止法」(山形女子短期大学紀要)18 昭61・3)でも論じた。なお山田孝雄氏のように接続助詞テをツの連用形と見なすツは連用中止法を有することになるが、山田氏自身テについて「殆単独に「つ」の意義を離れて使用せらるる傾向あり」(『日本文法講義』大11・2但し昭5・11訂正12版による 一六二頁)と指摘されるように、実際の用法の面では差がある。しかも後述のように、上代以来カヌツとカヌテは人称の面でも異なった性質を持つところからも、語源的なつながりはあるにせよ、上代には既にツとテは異質であったと考えるべきだと思われる。注5 「あゆひ抄」に「かね かねて」は、「て」文字あるもなきも同じ心なり」とあるのもこの点を指摘したものであろう。注6 注4文献に同じ。注7 実際、カヌ以外の語に下接するものも含めて、上代のツには否定的疑問推量・否定的反語表現を伴う確例はない。但し中古以後には存在する。注8 否定を表すもの(私注。カテニからの類推か)、余情を表すもの(大系、ニシテの意(全訳)等)。注9 兼ヌとの関連を考える説としては、木下正俊「猶し恋しく思ひかねつも」(関西大学文学論集)9-13 昭34・6)、渡辺実「同根の

動詞・副詞・接尾動詞」(『論集日本文学・日本語5現代』昭53・8
角川書店)等がある。

注10 大野晋「古文を教へる国語教師の対話」(『国語学』8 昭27・1)
にも、カヌは作為的・情意的な意味なのでツを下接しやすくヌを下
接しにくいという考えが示されているが、大野氏はカヌを古くから
ツを下接しなくてもそれ自体不可能の意味を有していたと見ておら
れるようで、この点筆者の考えとは異なる。

注11 『上代語助動詞の史的研究』(昭48・3 明治書院 五二九頁)。

注12 既成の索引類による限り、訓点資料にカヌの例は見出だせない。
また今昔物語では、和文的性格の強い巻にのみ用例が存在する。こ
れはカヌによる不可能表現が多分に主観的なものであるために概し
て平板的な漢文訓読文と相容れなかったこと等による。

注13 用例数だけで判断すると、散文では既にc類が著しく優勢になっ
ているようだが、前述の人称の問題を考慮して差し引いて考える必
要がある。事実この時期散文で増えているc類は、表2のように殆
どが一人称以外のものであり、一人称のc類が増えるのは十三世紀
になってからである。

注14 この点は拙稿「かねける」いとにくし——枕草子「三月ばかり物忌し
にとこ」段小考——(『山形女子短期大学創立二十周年記念論集 女性
——生活と文化』昭62・3)において論じた。

注15 橋本進吉「『がてぬ』『がてまし』考」(『上代語の研究』昭26・10
岩波書店 所収)。

注16 この他に、和歌集に取められている成立の古い歌においては当然
a類が用いられているが、それらは用例数に加えなかった。

注17 山口明徳「中世語における時の助動詞に対する意識」(『中世国語に
おける文語の研究』昭和51・8 明治書院 一四四頁)による。

〔付記〕

本稿は国語学会昭和六十一年度秋季大会における口頭発表をもとに纏

め直したものである。発表会の席上御意見・御教示を賜った方々に厚く
御礼申し上げる。

——梅花短期大学講師——

(昭和六十二年七月三日 受理)

(昭和六十二年十二月二十五日 改稿受理)